

# 翻訳通信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

## 目次

### 翻訳批評

山岡洋一

- 翻訳は進歩しているのか - 岩波文庫の4種類の『国富論』が物語るもの  
大正・昭和の初めから21世紀初めにかけて、岩波文庫で出版された『国富論』の翻訳4点を比較していくと、意外なことに、ある意味で古い訳ほど質が高かったともいえる。

### 私的ミステリ通信 第一回

越智めぐみ

- 本格ミステリと翻訳の賞味期限  
本格ミステリとその翻訳について、10回の予定ではじまった連載の第1回。今回は黄金期の本格ミステリの復刊がかかえる問題点を指摘する。

### 誰も教えてくれなかった英語 (第4回)

柴田耕太郎

- カンマの用法 (2)  
カンマの用法の第2回として、andの代わりにカンマ、読点の代わりにカンマ、付加のカンマなど、問題になりやすい点を取りあげる。

**翻訳通信** 〒216 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC01200@nifty.ne.jp

『翻訳通信』は有料会員制の媒体にする予定ですが、当面はテスト期間として無料で配信します。

**定期購読の申し込みと解除** <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

**バックナンバー** <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

## 翻訳は進歩しているのか - 岩波文庫の4種類の『国富論』が物語るもの

読者にとって、既訳がある本の新訳ができれば、少なくとも既訳より良くなっているはずだと期待するのが当然である。まして、出版社が既訳を絶版にして新訳を刊行したのであれば。

翻訳者にとっては、既訳がある本を翻訳しなおす場合、既訳を調べるのが当然の義務である。既訳より良いものにしなければ読者の期待を裏切ることになるし、そもそも翻訳を行う意味がない。

アダム・スミスの『国富論』を翻訳する作業をいま進めている。この本では明治以降、少なくとも9種類の翻訳が出版されているので、いってみれば身のほど知らずの暴挙なのだが、小人といえども巨人の肩の上に乗れば、遠くが見える可能性もある。既訳からしっかり学べば、21世紀に相応しい新しい訳ができる可能性がある。そういうわけで、既訳を集め、それぞれの良さがどこにあり、どこを学ばばいいのかを考える作業を続けている。

手元に8種類の既訳がある。明治16~21年(1883~88年)に刊行された石川暎作訳は入手できていないが、それ以外の主要な訳が揃っている。そのなかで目立つのは、岩波文庫で以下の4種類の訳が出版されていることだ。

- (1) 氣賀勘重訳『国富論(上)』(1927年)
- (2) 大内兵衛訳『国富論』(1940~44年)
- (3) 大内兵衛・松川七郎訳『諸国民の富』(1959~66年)
- (4) 水田洋監訳・杉山忠平訳『国富論』(2000~01年)

これらの訳はいずれも、それぞれの時代を代表する経済学者が訳したものであり、それぞれに学ぶべき点がたくさんある。だが、個々の語、個々のセンテンス、個々のパラグラフをどう訳すべきかといった具体的な点以外に、大正・昭和の初めから21世紀初めにかけての翻訳の歴史を知るうえで、この4種類の翻訳は貴重な資料になるように思える。そこで、翻訳の質、スタイル、パラダイムの変遷という観点から、この4種類の翻訳を比較していくことにした。

### 文体の違い

まず目につくのは、翻訳に使われている日本語の文

体が大きく違っていることだ。

もっとも古い氣賀訳は、1926年(昭和2年)に発行されており、大河内一男「『国富論』邦訳小史」(大河内一男監訳『国富論 III』中公文庫に収録)によれば、前年の大正15年に出版された本を文庫化したものである(第2編までの上巻のみが刊行され、残りは刊行されていない)。以下の引用をみれば明らかのように、旧字旧仮名を使い、文語体、それも漢文読み下しの文体で訳されている。漢文読み下しの文体はいわゆる翻訳調の基礎になっているが、氣賀勘重の訳文は意外なほど翻訳臭が少ない。英語で書かれた原文の意味を、文語体という日本語で読者に伝えようとしたものだといえる。

大内兵衛訳は、1940~44年というから、ちょうど第2次世界大戦の時期に刊行されたことになる。当然ながら旧字旧仮名が使われているが、文体は氣賀訳のものより新しい。明治以降に確立した新しい文章体、いわゆる言文一致体で訳されている。氣賀訳と同様に、翻訳臭は少ない。英語で書かれた原文の意味を、言文一致体という日本語で読者に伝えようとしたものだと思う。

大内・松川訳は1959~66年というから、ほぼ高度経済成長期に刊行されたものである。戦後のいわゆる国語改革の後に出版されているので、当然ながら新字新仮名が使われている。大内が共訳者のひとりということになっているので、大内兵衛訳を基礎にした改訳のはずだと思えるかもしれないが、「訳者はしがき」によれば、松川七郎の単独訳と考えるのが正しいようだ。文体という点では、言文一致体よりもいわゆる翻訳調に近い。

最後の水田・杉山訳は2000~01年に刊行されているし、2002年には第1巻の改訂版(2刷とされている)も出されているので、21世紀の訳だといえるだろう。だが、以下の引用をみればすぐに気づくように、文体は意外に古い。いわゆる翻訳調、つまり英文和訳で教えられる文体にきわめて近い。訳文は1965年に出版された水田洋訳(河出書房)に近く、小幅改訂版ともいえるほどである。

## 正確さ

翻訳の質という点で通常、もっとも注目されるのは誤訳の多寡であろう。誤訳が少ないほど質の高い訳だと考えられている。そして、既訳よりも新訳の方が誤訳が少なくなっているはずなので、新訳の方が良いはずだとみられている。新訳の訳者が既訳から学び、既訳に対するさまざまな批判や誤訳の指摘を学んでいれば、新しい訳ほど誤訳は少なくなっているはずである。

だが、世の中はそう簡単ではない。翻訳にあたって想定する読者が違っていれば、何を誤訳だと考えるかの基準が違ってくる。翻訳の目的が違っていれば、やはり何を誤訳だと考えるかの基準が違ってくる。だから、翻訳者の立場からは誤訳が大幅に減ったはずであっても、翻訳者にとって想定外の読者層、想定外の目的で読む読者にとっては、誤訳が多い(あるいは翻訳の質が低い)と感じられる場合もある。

つまり、誤訳の多寡にしろ、翻訳の質にしろ、簡単に判断できるものではないのだ。判断にあたって使う基準が違えば、意見が正反対になることもある。このため、訳文の正確さを考える際には、どういう読者を想定し、どういう目的を想定し、どういう基準を使ったときの正確さなのかを明確にしておくべきである。

4 種類の翻訳のうち、氣賀訳には「序」で翻訳の目的が明示されている。訳書 5 ページから引用する。

然れば斯る名著の翻譯を試みんとするに當り、吾人は一意正確に原文の意味を傳ふるに専念したること勿論なれども、併し原文に忠ならんとするの餘り、動もすれば迂曲難解の辭句に陥らんとする譯文の通弊は可及的之を回避するに苦心し、可及的平易通俗の語句を用ゆるに努めたり。其結果、同一の原語も前後の關係上二様又は三様に譯せし場合少なからず、又原文の二三文章を合して一文と爲し、若しくは其一文を二三の文章に區劃せしことも少なからず。畢竟原文の意義を可及的明瞭に邦人に傳へんとする微衷に外ならざるなり。

氣賀勘重のこの姿勢は、拙著『翻訳とは何か - 職業としての翻訳』で指摘した長谷川宏や森鷗外の姿勢にきわめて近い。「原語と訳語の一対一対応は求めない」とした長谷川宏と同様に、「同一の原語も前後の關係上二様又は三様に譯した」というのだ。氣賀訳の目標は「一意正確に原文の意味を傳ふる」ことにあり、したがって、氣賀訳の評価にあたっては、「原文の意味」をどこまで正確に伝えているかが基準にならなければならない。

他の 3 種類の訳では、翻訳の目的が明示されていない。だが、訳文を読むと、少なくとも水田・杉山訳の場合には目的がかなりはっきりしているように思える。水田・杉山訳では「原文の意味」を正確に伝えることは目的になっていない。いうならば、「原文の表面」を伝えることを目標にしている。

「原文の表面」を伝えることが翻訳の目的だということ、不思議に思えるかもしれない。だが、経済学や哲学の古典の翻訳では、これが目的になることが少なくない。『翻訳とは何か - 職業としての翻訳』で長谷川宏訳『精神現象学』の対極にあるものとしてとりあげた金子武蔵訳『精神の現象学』がまさにそうだった。

また、『国富論』のある翻訳について、capital と stock をどちらも「資本」と訳されたのでは原文にどう書いてあったのかが分からないではないかと非難した人がいる。これと同様の非難は長谷川宏のヘーゲル訳にもだされている。たとえば Substanz は「実体」と訳してくれないと、Substanz の意味が分からないではないかという。

こういう非難を聞くたびに、そう非難するのなら、なぜ原文で読まないのかと不思議に思う。翻訳は、「原文の意義を可及的明瞭に邦人に傳へんとする」ものである。「正確に原文の意味を傳ふる」ことが目的である。原文にどういう語が使われていたのかを知りたい人は原文を読めばいい。翻訳は原文が伝える「意味」を日本語で学びたい人のためにあるのであって、原文がどうであったかを示すためにあるのではない。これが少なくとも、氣賀勘重の立場である。

だが、これはひとつの立場であって、翻訳がこれとは違う立場から行われることもある。そのひとつの典型が水田・杉山訳であり、その特徴は「原文の表面」を伝えることを目標にしている点にあると考えるのだ。

水田・杉山訳は、訳書だけで『国富論』を読もうとする読者を対象にしていない。「原書」を読む読者に、参考として、要するにアンチョコとして使われることを想定して訳されている。したがって、水田・杉山訳の評価にあたっては、「原文の表面」をどこまで正確に伝えているかが基準になるだろう。

大内訳と大内・松川訳は、この両極の間にあると思える。そして、大内訳は氣賀訳にかなり近く、大内・松川訳は水田・杉山訳にかなり近い。

このように異なる評価基準に基づいて4種類の翻訳の正確さを考えていくと、甲乙つけがたいという結論に達する。つまり、「原文の意味」をどこまで正確に伝えているかを基準にすれば、氣賀訳が圧倒的に優れており、「原文の表面」をどこまで正確に伝えているかを基準にすれば、水田・杉山訳が優れている。大内訳と大内・松川訳は、どちらの基準でも少しおちるようだが、2つの基準での評価を合計すれば、やはり圧倒的に優れている。

### 分かりやすさと読みやすさ

翻訳の質を考えると、「分かりやすさ」「読みやすさ」が重視されることもある。この場合にも、「正確さ」と同様に、どのような基準で考えるかによって判断が違ってくる。

使われている言葉や表現、そしてとくに漢字という点では、氣賀訳の難しさが際立っている。ルビを付けてほしい漢字がたくさん使われているし、たとえルビがあっても、意味の分かりにくい語がたくさんある。「可及的平易通俗の語句を用ゆるに努めたり」という言葉が冗談だと思えるほどだ。

同じく旧字旧仮名でも、大内訳は圧倒的に読みやすい。現代の文章体の基本になっているいわゆる言文一致体が使われているからだ。ときどき読めない漢字にぶつかるが、それでも読書に差し支えるほどではない。

大内・松川訳と水田・杉山訳になると、使われている言葉や表現、そしてとくに漢字という点では、新聞記事と同等か、それより平易だと思えるほどである。

だが、視点を少し変えて、たとえば訳文の段落ごと、センテンスごとに、書かれていることの意味を理解しやすいかどうかという基準でみると、評価はがらりと変わる。言葉や漢字の難しさに慣れてしまえば、氣賀訳が圧倒的に分かりやすく読みやすいように思える。つぎに分かりやすく読みやすいのが大内訳であり、大内・松川訳はかなり読みにくく、水田・杉山訳はもう絶望的なほど分かりにくく読みにくいと感じる。

しかし、視点をもう少し変えて、原文と突き合わせて読むと想定した場合の理解しやすさを考えると、水田・杉山訳がいちばん良いという判断も成り立つ。ただし、原文の意味がよく分からないときには、氣賀訳や大内訳の方が役に立つかもしれない。

「分かりやすさ」「読みやすさ」という観点でみて、

ある意味で氣賀訳がもっとも優れているのは意外だともいえる。だが、聖書でも同じように感じることもある。一見難しい言葉や漢字が多用されている文語訳のほうが、一見やさしそうな新共同訳よりも意味を理解しやすい場合が少なくない。だから、翻訳で聖書からの引用があると、文語訳を使いたくなる。文語体はおそらく、きわめて論理的だし、表現力が豊富なのだろう。いわゆる言文一致体にはそこまでの論理性と表現力がなく、翻訳調は論理性と表現力の点で劣っている。

### 翻訳は進歩しているのか

以上のように、同じ岩波文庫で刊行された4種類の『国富論』の翻訳を比較していくと、翻訳ははたして進歩しているのかと疑問をもたざるをえなくなる。もちろん、観点を換えれば新しいものほど質が高いといえるのだが、ある意味では、昭和初めに刊行された氣賀訳がもっとも優れていて、時代をおうごとに翻訳の質が下がってきたともいえるからだ。

氣賀訳は古くて新しい翻訳、水田・杉山訳は新しく古い翻訳だ。原文の意味を伝えるより原文の表面を伝えようとする翻訳、訳書だけを読む読者を想定せず、原著を読む際の参考として訳書を求める読者を想定した翻訳というのは、もう時代後れだともいえるからだ。たとえば数十年前には大量に出版され、読まれていた対訳本は、いまではまったく流行らないのではないだろうか。要するに、水田・杉山訳で想定されている読者は、数十年前ならともかく、いまではほとんどいないのではないかと思えるのだ。

読者はおそらく、訳書か原著か、どちらかしか読まない。訳書を脇において原著を読む読者がはたしているのだろうか。そう考えると岩波文庫がなぜ、ある意味ではるかに優れた大内・松川訳を絶版にして、水田・杉山訳を刊行したのか、不思議に思えてくる。いやそれ以前に、なぜ大内訳を絶版にして大内・松川訳を刊行したのかが不思議だ。氣賀訳はある意味で圧倒的に優れているが、旧字旧仮名はともかく、文語体の訳を読む読者がいまそうたくさんいるとは思えない。しかも上巻だけで下巻がない。だからおそらく、大内訳を新字新仮名にしてだすのが、岩波にとってもっとも真っ当な方法のように思える。

翻訳者の立場からは、現代の文章体を使って氣賀訳を継承するのが、もっとも真っ当な方法のように思える。

## 4 種類の訳の比較

以下では、岩波文庫の4種類の翻訳を比較して、具体的にどのような違いがあるのかをみていく。第1編のなかから、翻訳の質、スタイル、パラダイムの違いを示すと思える部分をいくつか選んで、訳文を新しいものから順にあげ、最後に原文を示す。

『国富論』は経済の専門家に向けて書かれた本ではないので、原文は平易で分かりやすいが、それでも一部分だけを読むのはそう簡単ではない。そこで、とくに注目したい部分に下線を引く方法をとった。下線部分だけをみていただければ、論旨は理解できるはずである。

## 例1 - 代名詞

代名詞をどのように訳しているかをみれば、翻訳のスタイルがかなりよく分かる。少々長くなるが、第1編第10章第1節から引用しよう。

## (1-1) 水田・杉山訳第1巻178～179ページ

未開状態の社会における人類の、もっとも重要な職業である狩猟と漁撈は、前進した状態の社会では、人類のもっとも快適な娯楽となり、彼らは、かつては必要によって従事したことを、いまは快適のためにやっている。したがって社会の進歩した状態では、他の人びとが気晴らしにやっていることに従事しているのは、みなきわめて貧しい人びとである。……そうした職業にたいする自然の嗜好は、それによって快適に生活できるよりも多くの人びとをそれに従事させることになり、その人たちの労働の生産物は、つねにその量の割にはあまりにも安く市場に出まわることになり、その労働者にたいしてもっとも乏しい生計しか提供しない。

## (1-2) 大内・松川訳、岩波文庫(1)293～294ページ

狩猟や漁撈は、未開状態の社会では人類のもっとも重要な職業であったが、進歩した社会では人々のもっとも快適な娯楽になり、人々はかつては必要に迫られてしていたことを、いまでは快樂を求めてするようになる。それゆえ、社会の進歩した状態では、他の人々がなぐさみを求めてしていることを一個の職業にしている者は、みなひどい貧乏人だということになるのである。……こういう職業に興味をもつのは自然であるから、それに従事する人があまりにも多くなり、この職業では安楽に生活できないということになるのであって、そういう人々の労働の生産物は、つねにその量の割合にはあまりにも安価に

市場にもたらされるから、その労働者たちには、もっとも乏しい生活資料のほかなにものをもあたえることができない、ということになるのである。

## (1-3) 大内兵衛訳、岩波文庫(1)198～199ページ

社会が野蠻の状態にあったとき、人類の最も重要な職業であった狩猟と漁撈とは、進歩した社会においては最も愉快的な娯楽になり、人々は曾つては必要に出たることを今や道樂とするやうになる。そこで、進歩した社会においては、他人が消閑のためにしてゐる事を生業としてゐる者はみな貧民だといふことになる。……これは、かういふ職業に対する自然的の興味は、すべての人を快適に暮させ得べくあまりに澤山の人をこの職業に従事せしめるからであつて、彼等の労働の生産物は、その労働量の割合には常に非常に安くて市場に賣される、そのため労働者には最もみじめな生活以上に何物も與へられないことになるのである。

## (1-4) 氣賀勘重訳、岩波文庫上巻133ページ

狩猟と漁業とは社会未開の状態に在りては、最も重要な人間の職業たりしも、進歩せる社会状態に於ては、最も快適なる娯楽と化し去りて、世人は今や、先人が嘗て一度必要の為に従事したる其仕事を、快樂の為に遂行するに至れり。故に進歩せる社会状態に在りては、他の人々が逸樂として従事する其仕事に、一個の職業として従事する者は、何れも悉く甚だしき貧民なり。……要するに此等の業務に對する自然の嗜好は、餘りに多數の人々を斯業に誘致して、斯業に依りて快適に生活するを得ざらしめ、而して其労働の生産物は、労働の數量に比して常に甚だしく低廉に市場に提供せられ、労働當事者をして最も窮乏的な生活費の外、更に何物をも得る能はざらしむるなり。

(1-5) Hunting and fishing, the most important employments of mankind in the rude state of society, become in its advanced state their most agreeable amusements, and they pursue for pleasure what they once followed from necessity. In the advanced state of society, therefore, they are all very poor people who follow as a trade what other people pursue as a pastime. .... The natural taste for those employments makes more people follow them than can live comfortably by them, and the produce of their labour, in proportion to its quantity, comes always too cheap to market to afford anything but the most scanty subsistence to the labourers.

水田・杉山訳を読んだとき、「その人たちの労働の生産物は、つねにその量の割には」の「その量」は何の量だと考えるだろうか。たぶん、「生産物の量」と考えるはずだ。そう考えながら読んでいくと、「その量の割にはあまりにも安く市場に出まわる」とはどう

という意味なのかよく分からなくなる。

大内・松川訳も水田・杉山訳とほぼ同じで、「つねにその量の割合には」になっている。ところが、大内訳では「その労働量の割合には」だし、氣賀訳は「労働の數量に比して」だ。「生産物の量」ではなく、「労働の量」なのだ。

そこで原文をみると、the produce of labour, in proportion to its quantity だ。原文からは its が何をさすかは 2 つの理由でほとんど疑問の余地がない。第 1 に、its より前にある単数形の名詞を探していくと、もっとも近くにあるのが labour だ。英語の代名詞の性格を考えると、意味の上で無理がなければ、its が labour をさすと考えてまず間違いはない。第 2 に、its が labour をさすと考えれば、このセンテンスの意味をすっきりと理解できる。

この its を水田・杉山訳、大内・松川訳はそのまま「その」と訳したわけだ。だから誤訳ではない。原文の表面を正確に伝えるという観点に立てば、完全に正しい訳だといえる。だが、原文から離れて日本語の文章として読むと、水田・杉山訳の「その量の割には」が「労働の量の割には」を意味するとはすぐには考えられない。日本語の代名詞の性格上、「その」はこの部分で主題になっていること、つまり「生産物」をさすと考えるのが自然だからだ。「生産物の量の割には」では奇妙だと感じるが、では何の量の割になのかは、すぐには分からない。

同様のことは水田・杉山訳の「彼らは、かつては必要によって従事したことを、いまは快適のためにやっている」の部分にもいえる。「彼ら」とは誰なのか。原文を読むと、they が mankind を指すことに疑問の余地がない（ちなみにこの mankind は複数扱いになっている）。それより近くにある複数形の amusements では意味の上で無理があるからだ。この they を、水田・杉山訳では「彼らは」としているわけだが、原文から離れて日本語の文章として読むと、「彼ら」が誰なのかがピンとこない。大内・松川訳と大内訳では「人々」、氣賀訳では「世人」になっていて、日本語として意味が通る文章になっている。

## 例 2 - 定冠詞の処理

代名詞の処理に似た問題に、定冠詞の処理がある。第 1 編第 9 章の例をみてみよう。

(2-1) 水田・杉山訳第 1 巻 167 ページ

.....さきの戦争が終結してしばらくのあいだ、最良の信用をもつ私人だけでなく、ロンドンの最大の会社のうちいくつかも、それ以前には四パーセントから四・五パーセント以上は支払っていなかったのに、五パーセントで借りるのが通例となった。われわれが北アメリカと西インドで領土を獲得したために領土と事業が大いに増加したということが、この社会の元本の減少をなにも推定しないでも、このことを十分に説明するだろう。既存の貯えで営まれるべき新事業がこのように大幅に増加したことは、競争が減り、そのため利潤が増したにちがいない多数の個別部門に用いられるその量を必然的に減らしたにちがいない。.....

(2-2) 大内・松川訳、岩波文庫(1) 279 ~ 280 ページ

.....最近の戦争の終結後しばらくのあいだというものは、以前にはいつも四分か四分半しか支払わなかったところの、最大の信用を博している私人たちばかりではなく、ロンドンの最大の諸会社のあるものも、ふつう五分で金〔かね〕を借りていたのである。これは、社会の資本的資財 (capital stock) が減少したためだと考えるべきことではなくて、わが北アメリカと西インド諸島との獲得によって、領土も事業も大いに増加したということから十分説明されるであろう。在来の資財で経営されるべき新しい仕事がかれほど大増加したということは、多数の特定の部門に使用されている資財の量を必然に減少させたにちがいないし、またこれらの部門では、競争が比較的すくないから、利潤が比較的大きくなったにちがいないのである。.....

(2-3) 大内兵衛訳、岩波文庫(1) 185 ~ 186 ページ

最近の戦争終了後、しばらくの間、信用のもっとも厚い個人のみならず、ロンドンの最大の諸会社も、その借入金に對しては五分を拂ふのが普通であった、かれ等は、それ以前は、四分または四分半の利子しか拂ってゐなかつた。これは、社会の資本的資財 (capital stock) の減少によるものと考へる必要はないのであつて、吾々が北アメリカと西インドとを獲得し、領土も事業も大いに増加したことに由るものと解して差支へないのである。これだけふえた新しい仕事を、従來の資本で經營して行く結果、多くの特殊の部門において使はれる資本の量は減少したに相違ない、従つてこれ等の部門においては、競争が減じ、利潤が増加したに相違ない。.....

(2-4) 氣賀勘重訳、岩波文庫上巻 124 ページ

.....倫敦に於ける信用最良なる私人は勿論、其最大なる會社の或者は、舊來通例四朱乃至四朱五厘以上の利子を支拂ふことなかりしが、最近の戦争終了後、或期間の間、此等の人々は一般に五朱利にて借入

る、を普通とするに至れり。此事實は社會に於ける資本〔キャピタルストック〕の何等の減少を想像する迄も無く、唯唯單に北米及び西印度に於ける我國の獲得に基づく領土及び商業の大増加を回想せば、其理由自ら明なる可し。舊來の資本〔ストック〕に依りて遂行せんとする新事業の斯る大増加は、必然的に各種事業の一大部分に於ける使用資本〔ストック〕の數量を減少せざるを得ず。其結果、此等各種の事業に於ける競争を減じて其利潤を増加せざるを得ざりしなり。……

(2-5) For some time after the conclusion of the late war, not only private people of the best credit, but some of the greatest companies in London, commonly borrowed at five per cent, who before that had not been used to pay more than four, and four and a half per cent. The great accession both of territory and trade, by our acquisitions in North America and the West Indies, will sufficiently account for this, without supposing any diminution in the capital stock of the society. So great an accession of new business to be carried on by the old stock must necessarily have diminished the quantity employed in a great number of particular branches, in which the competition being less, the profits must have been greater.

ここで、水田・杉山訳の「その量」が何の量なのかが分かるだろうか。原文をみると、the quantity なので、「その量」という訳は間違っているわけではない。原文の表面を正確に伝えるという観点に立てば、完全に正しい訳だといえる。だが、訳文を読んでも意味は分からない。そこで原文をもう一度みると、the quantity of the stock であることがすぐに分かる。

この部分は、大内・松川訳では「資財の量」、大内訳では「資本の量」、氣賀訳では「資本〔ストック〕の數量」と訳され、訳文だけで意味が分かるようになっている。「資本の」とか「資財の」とかの言葉は原文にないという意見があるかもしれないが、定冠詞にそう書かれているということもできる。

### 例 3 - 原語と訳語の対応

氣賀勘重が、「同一の原語も前後の関係上二様又は三様に譯せし場合少なからず」とわざわざ断っているのは、経済学などの専門分野の翻訳で、原語と訳語の一对一对応を求める場合が少なくないからだ。

言葉とは本来、いくつもの意味をもっているものなので、そもそも、原語と訳語の一对一对応を求めることには無理がある。にもかかわらず、一对一对応を求めるのは、原著者が言葉をひとつずつ定義し、一語一

義の原則にしたがって執筆する場合があるからだ。たとえば法律の分野では、一語一義が最大限に追求される。一語一義の原則にしたがって執筆された文章は、いわば人工的な言語であって、専門分野の教育を受けた人しか理解できないものである。

では『国富論』の原文はどうかというと、アダム・スミスが一語一義どころか、一語をさまざまな意味で使っていることは常識である。アダム・スミスの時代には経済学は成立していなかったし、アダム・スミスが言葉をひとつずつ定義して新しい専門分野を確立しようとしたわけでもない。したがって、多義的に使われている言葉に一对一对応で訳語をあてはめていくことには、かなりの無理がある。

このため、『国富論』の翻訳では、原語と訳語の一对一对応を完全に追求することはできない。それでも、訳者によって、多義的な原語の処理の方法に違いがある。大雑把にいうなら、氣賀訳がもっとも自由に訳語を使い分けており、新しい訳ほど、一对一对応に近づいてきているように思える。

こうした訳者の姿勢を示す例を第 1 編第 1 章からあげてみよう。

#### (3-1) 水田・杉山訳第 1 巻 27 ページ

……農業に従事する労働のさまざまな部門のすべてを、完全に分離するのがこのように不可能だということは、おそらく、この手仕事における労働の生産力の改良が、かならずしもつねに製造業における改良と歩調をあわせない理由である。

#### (3-2) 大内・松川訳、岩波文庫(1) 103 ページ

……農業に従事する労働のさまざまな部門のすべてを、完全にあますことなく分化してしまうのは不可能だということが、おそらくは農芸の生産における生産諸力の改善が、なぜもろもろの製造業のそれと必ずしもつねに歩調をあわせることができなかったか、ということの根拠であろう。

#### (3-3) 大内兵衛訳、岩波文庫(1) 26 ページ

……農業に使はれる労働のこれ等あらゆる部門を完全に十分に分離させることが出来ないといふことは、恐らくは、この技術における労働の生産力の改善が、何故に製造業におけるその改善に及ばないかの理由であらう。

#### (3-4) 氣賀勘重訳、岩波文庫上巻 16 ページ

……農業に使用せらるゝ各種部門の労働の間に完全

なる分業を行ふの此不可能こそは、惟ふに正に農業労働の生産力の改良が常に製造業に於ける其改良と平行して進まざる所以の原因なる可し。

(3-5) This impossibility of making so complete and entire a separation of all the different branches of labour employed in agriculture is perhaps the reason why the improvement of the productive powers of labour in this art does not always keep pace with their improvement in manufactures.

水田・杉山訳の「この手仕事」が何を意味するか分かるだろうか。正直のところ、この訳文からはよく分からない。よくは分からないが、農業と製造業の違いを論じている箇所だし、「この手仕事」と「製造業」が対比されているので、奇妙な言葉ではあるが、たぶん農業のことなのだろうと感じる。原文をみると this art である。大内・松川訳は「農芸」、大内訳は「この技術」だ。そして氣賀訳をみると「農業」になっている。氣賀訳をみて、ようやく安心する。原文の this art はやはり agriculture の言い替えだったのだ。

英語では通常、同じ言葉を繰り返し使うのを嫌うので、ひとつの語を使うと、つぎには代名詞や代動詞などを使うが、それができない場合には、同じ事柄や概念などを同義語で表現することが少なくない。日本語にはこういう感覚があまりなく、逆に同じ語の繰り返しを好む傾向があるので、言い換えは日本人が英文を読むときに盲点になりがちな点だ。たとえば、大学の原書講読ではじめて『国富論』を読む学生にとっては、だから、原書講読の際の参考資料として使うとしても、じつは氣賀訳がもっとも親切だともいえる。

だが、翻訳という観点にたったとき、言い換えをすべて氣賀勤重のように訳さなければならないと断言することはできない。言い換えとして使われた言葉には、もとの言葉と違ったニュアンスがあるのだから、別の訳語を使うべきだとする考え方もありうる。だから、「農芸」「この技術」という訳語が間違いだともちろんいえない。

しかし、「手仕事」には、じつは別の問題がある。第 1 に、「手仕事」という訳語は、2002 年の第 2 刷で改定されたもので、2000 年の第 1 刷では（おそらく杉山忠平の原稿では）「技芸」になっていた。第 2 に、「手仕事」は第 2 刷の「序文および本書の構造」（21 ページ）で以下のように使われている。

……ローマ帝国の没落以来、ヨーロッパの政策は、農村の産業である農業よりも、町の産業である手仕

事、製造業、商業に有利であった。……

Since the downfall of the Roman empire, the policy of Europe has been more favourable to arts, manufactures, and commerce, the industry of towns, than to agriculture, the industry of the country.

第 3 に、第 2 刷 21 ページの「手仕事」には訳注がついている。原文の art は craft であり、mechanical arts ともいいうるので「手仕事」と訳したと説明し、例外的に「技術」「芸術」と訳した箇所があると断っている。また同 455 ページに以下の訳注がある。

手仕事職人 mechanick とは前述の手仕事 art を担当する職人（たとえば時計職人）のこと。

つまり、水田洋は art を時計製造のような手工業を意味すると解釈したうえで「手仕事」と訳している。「手仕事」は「農村の産業である農業」ではなく、「町の産業」である（この「町」について、「農村の対比では『都市』と訳したいところだが、別に city という言葉がある以上、それと区別しなければならない」と訳注 450 ページに書かれている）。

したがって、(3.1)の「この手仕事」は「農業」の言い換えではないとする解釈も可能だ。そう解釈して、この「手仕事」を「町の産業」だと考えると、水田・杉山訳は支離滅裂になる。誤訳だとする見方も成り立つし、少なくとも原文を読まずに訳文と訳注だけを読む読者にとっては、誤解しやすい訳だといえる。

#### 例 4 - 関係詞節

関係代名詞なども、言い換えの一種だとみることできる。関係代名詞などを使った関係詞節をどう訳すかも、翻訳のスタイルをよく示すものである。やはり第 1 編第 1 章から例をみてみよう。

(4-1) 水田・杉山訳第 1 巻 34 ページ

……染色工が使用し、しばしば世界の最遠隔地の所産である、さまざまな薬品を集め合わせるために、特にどれほどの商業と海運が、どれだけ多くの造船工、船員、製帆工、製綱工が、従事しなければならなかったことか。

(4-2) 大内・松川訳、岩波文庫(1) 113～114 ページ

……染色工が使用するところの、しばしば世界の果ての果てからもちきたされる薬剤を集積するために、とりわけどれほど多くの商業と航海業が従事し、またどれだけ多数の造船工・水夫・帆布製造人・ロー



ブ製造人が、従事しなければならなかったことであろうか！

(4-3) 大内兵衛訳、岩波文庫(1) 35 ページ

.....染色者がそれに使つたいろいろの薬剤は、世界の最も遠い隅々から持ち来されたものであるが、それを持ち来すために如何に多くの商業と航海業が必要とされ、また如何に多くの造船工、水夫、帆布製造者、綱製造者が使用されねばならなかつたか！

(4-4) 氣賀勘重訳、岩波文庫上巻 22 ページ

.....單に其染色人の用ゆる藥材のみに就て之を觀るも、此等の藥材中には世界最遠隔の地方より來れる物少なからざるが故に、其種々なる藥材を集むるが爲には特に幾多の商業と航海業とを要し、幾多の造船匠、水夫、帆布製造工、製綱夫等を要するものあり。

(4-5) How much commerce and navigation in particular, how many ship-builders, sailors, sail-makers, rope-makers, must have been employed in order to bring together the different drugs made use of by the dyer, which often come from the remotest corners of the world!

関係詞節の訳し方について考えるとき、アダム・スミスの時代には現在とカンマの使い方が違っていたことに注意する必要がある。学校英語ではカンマの有無で制限用法と非制限用法があると教えられるが、スミスは関係詞の前にほぼつねにカンマを付けている。だから、カンマがあるから非制限用法だとはいえない。

この点を前提に 4 つの訳をみていくと、新しいものほど学校英語の原則に忠実に訳しており、古いものほど自由に訳していることが分かる。そして、水田・杉山訳をみると、「染色工が使用し」「しばしば世界の最遠隔地の所産である」「さまざま」がいずれも「薬品」を修飾する形になっていて、日本語の文章としてみたとき、かなりの悪文であることに気づくはずだ。一読しただけでは意味が理解しづらいのだ。これに対して氣賀訳は、見事な日本語になっている。ただし、原文と突き合わせて読む読者にとっては、おそらく氣賀訳はそれほど親切だとはいえない。

関係詞節の訳し方については、例 2 の下線部分でも上記と同じことがいえる。

## 例 5 - 修飾語の並列

『国富論』の性格を考えれば、語や構文をどう訳すかよりも、原文の論理をどう伝えるかが大切なはずであ

る。そのような例のひとつとして、修飾語の並列をどう訳しているかをみてみよう。第 1 編第 10 章から引用する。

(5-1) 水田・杉山訳第 1 巻 200 ページ

.....投機的商人は、一つの、正規で、安定し、よく知られた事業部門では仕事をしない。彼は今年は穀物商、翌年はワイン商、翌々年は砂糖商か、タバコ商か、茶商であったりする。

(5-2) 大内・松川訳、岩波文庫(1) 320 ページ

.....投機商というものは、けっして正規で基礎のかたい、またはよく知られた事業部門に従事しない。かれは、ことしは穀物商をしているかと思うと、つぎの年にはぶとう酒商になり、そのつぎの年には砂糖・タバコ・または茶の商人になる。

(5-3) 大内兵衛訳、岩波文庫(1) 222 ページ

.....投機的商人なるものは決して一つの正規な基礎の固い世間によく知られた部門の事業をやらない。彼は今年は穀物の商賣をしてゐるかと思へば、その次の年は砂糖、烟草または茶の商人になつてゐる。

(5-4) 氣賀勘重訳、岩波文庫上巻 151 ページ

.....投機的商人は常に周知せられたる確定せる正規的の一定職業を營むものに非ず。今年穀物商人たるも翌年は葡萄酒商人と為り、又其翌年には更に砂糖、烟草又は茶の商人と為る等、.....

(5-5) The speculative merchant exercises no one regular, established, or well-known branch of business. He is a corn merchant this year, and a wine merchant the next, and a sugar, tobacco, or tea merchant the year after.

水田・杉山訳を読むと、意味がよく分からないと感じる。「一つの、正規で、安定し、よく知られた事業部門では仕事をしない」というが、ワイン商、砂糖商、タバコ商、茶商はどれも、そういう事業ではないかと思えるのだ。

だが、原文を読むとどうも違う。4 つ並列されている修飾語のうち、one に力点があるように感じる。氣賀訳を読むと、その点のはっきり分かる訳になっている。「一定職業を營むものに非ず」。ワイン、砂糖、タバコ、茶などの売買のうちの「ひとつ」につねにたずさわっているわけではないといっているのだ。氣賀訳では、4 つ並列されている修飾語のうち最初にあるものを最後にもってくることで、この点を示している。ある意味で思い切った訳だともいえるが、氣賀勘重な

ら、そう訳さなければこの部分の論理構造が読み取れなくなるではないかというはずだ。

## 例 6 - 論理

もうひとつ、原文の論理の伝え方に関する例を第 1 編第 2 章から紹介する。

### (6-1) 水田・杉山訳第 1 巻 38 ページ

.....動物が人あるいは別の動物から何かを得ようと思うとき、それをしてもらうのに必要な相手の好意を手に入れる以外に説得の方法ない。子犬は母犬にじゃれつき、スパニエルは、食事の主人から食べものをもらおうとするとき、さまざまな芸をして主人の注意をひくことにつとめる。人もときには仲間と同じ技術を用いる。そして自分の意図どおりに仲間を行動させる手段がほかになければ、あらゆる卑屈なへつらいの振舞いで相手の好意を手にいれようとつとめる。しかし、人にはどんなばあいにもそうする時間があるわけではない。文明社会では、人はつねに多数の人びとの協力と援助を必要としているのに、一生をかけても何人かの人びとの友情を得るのにたりない。

### (6-2) 大内・松川訳、岩波文庫(1) 117~118 ページ

.....動物は、人間または他の動物のいずれかから、なにかを獲得しようとするばあいには、そうしてもらおうとする者の好意をかちえる以外には、どのような説得方法ももちあわせていないのである。子犬は母犬にじゃれついてごきげんをとり、スパニエルは食事の主人の注意をひくためにありとあらゆる芸をして、主人からのごちそうにありつこうとする。人間も、ときにはその同胞に対してこれと同一の技巧を用い、かれらを自分の好むとおりに動かす方法が他になにもないばあいには、あらゆる卑劣な、こびへつらうようないんぎんぶりを示しながら、その好意を買おうと努力する。とはいえ、人間はあらゆる機会にこういうことをするだけの時間的な余裕をもっていない。文明社会では、どのようなときでも、人間はたいへんな数にのぼる人々の協働や援助を必要としているにもかかわらず、かれは自分の全生涯をかけても、少数の人々の友情をかちえることさえやっとなことなのである。

### (6-3) 大内兵衛訳、岩波文庫(1) 39 ページ

.....動物は、人間または他の動物から何かを得ようとする時には、それをして呉れる人の好意に訴える外には、他に、如何なる説得の方法をももたない。仔犬は母犬に尾を振って甘え、スパニエルは主人に御馳走を貰おうと思ふ時には、御馳走を食べてある主人の注意を引くべくいろいろの藝をして見せる。

人間も時々、その同胞に対して同様な技術を用ひる、そして自分の思ふやうに彼等を動かす方法が他に見付からない時には、彼はさまざまの卑劣な媚を呈してその好意を買はうと努めるのである。しかしながら、あらゆる場合にかう云ふことをしてゐることは、時間が許さない。文明社会においては、彼の全生涯を盡してもわづかに数人の友人を得ることは困難であるにかゝらず、彼は如何なる時といへども非常に多くの人々の共同と援助とを必要とする。

### (6-4) 氣賀勘重訳、岩波文庫上巻 25 ページ

.....一動物が或人間又は他の動物より或物を得んことを欲する場合には、該動物は其要求する奉仕の授與者の恩恵を仰ぐの外、復た他に之を勸説するの手段を有することなし。仔犬は母獸に媚を呈し、家犬は其主人の食事に際し、百千の愛嬌を試みて、以て只管其眷顧を買はんと得るに努むるなり。人間も亦時に其同胞に對して同様の方法を用ひ、該同胞をして自己の志望に添ふの行為に出でしむ可き他の適當なる方法無き場合には、あらゆる卑屈なる媚諛的行為に依りて其愛顧を買はんと努むることありと雖も、併し總ての場合に欺る行動を用ゆるが如きは、到底時間の許さざる不可能事たるを免れず。蓋し他人の親切を買ふは頗る困難のことに屬し、終生之に努むるも尚ほ能く僅數の人より之を期待し得るに過ぎざるに、然るに文明國に於ては、人間は常住不斷、大多數の人士の協力と援助とを必要とするものあればなり。

(6-5) When an animal wants to obtain something either of a man or of another animal, it has no other means of persuasion but to gain the favour of those whose service it requires. A puppy fawns upon its dam, and a spaniel endeavours by a thousand attractions to engage the attention of its master who is at dinner, when it wants to be fed by him. Man sometimes uses the same arts with his brethren, and when he has no other means of engaging them to act according to his inclinations, endeavours by every servile and fawning attention to obtain their good will. He has not time, however, to do this upon every occasion. In civilised society he stands at all times in need of the cooperation and assistance of great multitudes, while his whole life is scarce sufficient to gain the friendship of a few persons.

水田・杉山訳を読むと、なぜここで「友情」の話がでてくるのか不思議に思うはずである。アダム・スミスは道徳哲学者だったというから、友情について論じるのは不思議ではない。だが、なぜここで急に友情論を展開するのか、理解に苦しむはずである。この疑問を解消するには氣賀訳を読むしかない。この部分の論理の流れを疑問の余地なく伝える見事な訳だ。

## 本格ミステリと翻訳の賞味期限

はじめまして。越智めぐみと申します。「翻訳通信」の主宰者山岡洋一さんから「翻訳」と「ミステリ」をキーワードに何か書いてもいいとお許しをいただき、だいたい10回の予定で大好きな海外ミステリについて書かせていただくことになりました。格調高い「翻訳通信」の中では異色のコーナーになってしまっていますが、ミステリはエンターテインメントですので、肩のこらない、気軽に読んでいただけるコーナーを目指していきたいと思えます。

ミステリと一口に言ってもいろいろなジャンルがあります。私は一般に「本格ミステリ」と呼ばれているジャンルで、少し古めのものが好きです。本格ミステリ（英語では puzzler）とはいったいどんなミステリかというと、謎解きを中心にした小説で、事件を推理し解決する探偵役となる人物が、結末近くで関係者一同を集めて自分の推理を発表する、というのが古典的なパターンです（「名探偵みなを集めてさてと云い」という川柳もあるくらいです）。ミステリの元祖と言われるエドガー・アラン・ポーからシャーロック・ホームズ、アガサ・クリスティにエラリー・クイーン、新しいところではコリン・デクスターやピーター・ラヴゼイなども本格ミステリの作家です。

本格ミステリの黄金期と呼ばれる第一次大戦から第二次大戦の間、イギリスとアメリカを中心に、まさに百花繚乱という感じで、次々と本格ミステリが発表されました。専門のミステリ作家ではない人物が書いた傑作も多く、大学の英文学の教授であるマイケル・イネスや、あの『くまのプーさん』の作者A・A・ミルン（余談ですが、『くまのパディントン』の作者マイケル・ボンドもミステリを書いています）、イギリスの桂冠詩人セシル・デイ・ルイス（ミステリ作家としての名前はニコラス・ブレイクで、俳優ダニエル・デイ・ルイスの父親でもあります）などもミステリ作品を残しています。

こうした本格ミステリ黄金期の作品群は第二次大戦後に大量に日本に紹介されました。あの少年探偵団の生みの親、江戸川乱歩も評論活動を通して、海外ミステリの紹介に尽力しています。「古典的名作」がミステリの全集や文庫などまとまった形で刊行された時代です。

その後ハードボイルドや社会派といった新しい形のミステリに押され、一時本格ミステリがかえりみられない暗黒時代がありました。この時期に、今まで刊行された黄金期の名作の翻訳本の多くが絶版などで入手困難になってしまいました。私事で恐縮ですが、私が大人の本を読む年齢になったのはちょうどこの時期で、右をむいても左をむいても「幻の名作」だらけの絶望的な世の中でした。

しかし時代はまた変わりました。国内ミステリで新本格のミステリが隆盛するのと呼応するかのようになり、海外の古いミステリも振り向かれるようになりました。各社から次々と黄金期のミステリの復刊や新訳が出るようになりましたし、未訳作品の発掘も盛んです。本当に喜ばしい限りです。

では今、翻訳ミステリ界に問題はないのかということ、私はいわゆる賞味期限の問題があると思えます。ミステリの場合、なんといっても娯楽作品ですから、これは大きな問題です。気軽に楽しんで読むはずのミステリが、訳のせいでひどく難解になってしまったりします。原文である英語は日本語ほど変化していないので、英語圏の読者が感じない違和感を日本の読者が感じるようになってしまっているのです。ミステリに限らずエンターテインメントは知識を得るために読む本ではありません。読んでいる間のひとときの時間を楽しむための本です。どれだけドキドキ、ワクワク、そして時に悲しく（ミステリの場合はびっくりも）させてくれるかというのが一番大事なところなんです。だから文体や雰囲気違和感があるというのは、とても問題なのです。

実例として長らく幻の名作であったドロシー・L・セイヤーズの『ナイン・テイラーズ』の一部を引用させていただきます。この作品はイギリスミステリの四大女流作家の一人セイヤーズの代表作といってもいい作品で、イギリスの小村の情景を鳴鐘術（いわゆる日本の鐘つきとは全然違います）の蘊蓄[うんちく]とからめていきいきと描いた傑作です。

またまた私事で恐縮ですが、この本は長い間私にとってメアリー・ロバーツ・ラインハートの『螺旋階

段』と並んで、「幻の名作」の代表格でした。昭和33年（1958年）に平井呈一訳（東京創元社世界推理小説全集 36）が出て、その後絶版になっていましたが、98年に浅羽英子訳（東京創元社創元推理文庫）、99年に門野集訳（集英社集英社文庫）があいついで出ました。まったく、いい時代になりました。

「ナイン・テイラーズ」のあらすじとかさわりを紹介させていただくと、難事件を解決するのが趣味のピーター・ウィムジイ卿は従僕のバンターとともに自動車で走っている途中、小村フェンの近くで吹雪の中で車が故障し、立ち往生してしまいます。助けを求めた教会では、ちょうど新年の鐘をつく人数が足りず、困っていました。頼まれるといやといえないお人よしのウィムジイ卿は（しかもたまたま（！）鳴鐘術の心得もあったので）、疲れているのに徹夜で鐘つきをします。そして時は流れ春、ウィムジイ卿のもとにフェンのあの教会の墓地で身元不明の死体が発掘されたとの一報が届き、ウィムジイ卿はさっそく事件の捜査に乗り出すのでした……。

引用は冒頭、車が故障し、寒風の中で途方にくれている場面でウィムジイ卿がバンターに言った台詞です。

## 原文

"Thank god," said Wimsey. "Where there is a church, there is civilization..... I bet that Kingsley welcomed the wild north-easter he was sitting indoors by a good fire, eating muffins. I could do with a muffin myself. Next time I accept hospitality in the Fen-country, I'll take care that it's at midsummer, or else I'll go by train...."

## 平井訳

「おい、しめたぞ！」とウィムゼーはいった。「教会のあるところなら、ちっとは開けているだろう。……きつとなんだなキングスリーのやつ、今ごろはぬくぬくと炉端で暖まりゃがって、饅頭 [マッフィン] でも頬ばりながら、北風ござんなれとばかり、ふんぞり返っているにちがいないぞ。見る、こっちはお前、うっかりすると自分が饅頭になりかねない始末だ。…なんだな、こんど沼沢地方 [フェン] でお恵みにあずかるんだったら、せいぜい気をつけて、夏場にすこったな。でなきゃあ、汽車で来るこったよ。…」

## 浅羽訳

「助かった！ 教会のあるところ人家あり。……キングズリー（英十九世紀の詩人）は荒々しい北東の風を歓迎しているが、どうせうちの中で、暖かい

火のそばに坐り、マフィンでも食べながら書いたんだろう。マフィンなら僕だって食べたいよ。今度フェン地方への招待を受ける時には夏至の頃だと確かめてからにしよう。でなければ汽車で来る。……」

## 門野訳

「ありがたい！」ウィムジイは言った。「教会のあるところ、人里ありだ。……キングズリーに、荒ぶる北東の風を歓迎するなんていう一節があるが、あれは暖炉の前に座り、ぬくぬくとマフィンでも食べながら書いたに違いない。私だって、マフィンを食べながらなら、それくらい言うてもいい。つぎにフェン地方への招待を受けるのは、真夏に限ろう。さもなければ汽車を使うかだ。……」

平井訳でマフィンが饅頭 [マッフィン] になっているのは時代的にしょうがないとしても、お育ちのいい貴族であるウィムジイ卿の「キングスリーのやつ」とか「暖まりゃがって」とか「お恵みにあずかる」などの言葉遣いにはどうも違和感があります。やはり21世紀の読者には平井訳のウィムジイ卿より浅羽訳、門野訳のウィムジイ卿の方がぴったりくる気がします。これは優劣ではなく、感覚の時代性の問題でしょう。

そういう意味において、50年代から60年代頃に翻訳されたミステリのほとんどは賞味期限を過ぎていると言ってもいいかもしれません。たとえばエラリー・クイーンの名シリーズのように、「必読」とされるミステリにも、30年以上前の訳しかないものが数多くあります。最近国内ミステリの人気作家の作品を通じて、クイーンなどに興味を持つ若い読者も多いのですが、そうした新しい読者にとって古い訳文はとっつきにくいというのが正直なところだと思います。

しかしクラシック・ミステリの場合、ただ読みやすく現代的な訳文であればいいというものではありません。作品の雰囲気になじみのあるものではなくてはならず、やはり古き良き時代の雰囲気を感じさせてほしいものです。難しいことですが、その両立を目指すべきだと思います。

近年多くの作品が発掘されているとはいえ、まだまだ「未訳の名作」や「幻の名作」はたくさんあります。そこで勝手ながら第2回以降、私が大好きで、でも日本ではまだ日の目をみていないミステリを中心に紹介していきたいと思っていますので、おつきあいのほどよろしく願いいたします。

## カンマの用法 (2)

挿入と言い換えは比較的分かりやすいが、and の代わり、読点の代わりにカンマはふだん気にしないことが多く、また付加のカンマは微妙なニュアンスがあり読み取り方がむずかしい。

- (1) 挿入
- (2) 言い換え (以上は前号)
- (3) 文の区切り: 句、節、文などを区切る。(6)と区分しにくいことがある
- (4) 関係代名詞の非制限用法: 先行詞の属性を述べる
- (5) 並列・列挙: 並列の and と共に用いられるカンマ
- (6) 読点の代わり: 掛かり方を分かりやすくする。除ってもよい場合がある
- (7) 付加的に続ける: 前の部分で意味は完結しているが、さらに補足する
- (8) and の代わり: リズムを生み出す。文体を締める

## 1、基本例

## 文の区切り

If you are ever in London, come and look me up.

\* if 節と帰結節を区切るしるし

(ロンドンに来たら、訪ねてきてください)

## 関係代名詞の非制限用法

The two passengers, who were seriously injured, were taken to hospital.

\* who 以下カンマまでは the two passengers の属性。

(二人の乗組員は重傷で、病院へ運ばれた)

## 並列・列挙

We think about our faces with vanity, resignation, anxiety, and the unease brought on by self-consciousness.

\* vanity 以下4つの名詞が列挙され、並列している

(誰もが自分の顔に思い巡らす。カッコいいとか、いやダメだとか、どうなんだろうとか、自意識が邪魔してうまく考えられない、とか)

## 読点のかわり

From the room above, the garden looks very beautiful.

\* カンマがないと、above the garden ととられて混乱する

(上の部屋からは庭はとても美しくみえる)

## 付加的に続ける

They act upon a species of instinct, really a code of conduct.

\* カンマの前までで文意は完結している。それに補足する情報がカンマ以下で示される。文の構成要素としては S,V,O,C の類別に入らない副詞的修飾語

(彼らは一種の本能にしたがって行動する。まるで行動規範でもあるかのように)

## and の代わり

The protective, kindly figure has been replaced by a dangerous and destructive creature.

\* 性質・形状を示す形容詞の並列ではカンマが and の代わりをする。dangerous and destructive は、似た意味と d の音を重ね臨場感を出す対語

(自分を守ってくれる優しい人物が、ひとに危害を加える獰猛な生き物に成り変っていたのだ)

## 2、例文点検

## (3)文の区切り

Because the behaviour of others is similar to our own, we surmise that they are like us.

\* 従節と主節を区切る

(とる行動が似ているから、その人が自分に似ているのではと推測する)

And the earlier and more thoroughly this lesson is learned, the better it will be for his peace of mind and success in life.

\* 比較構文での前後の節を区切る

(この教訓を学ぶのが早ければ早いほどまた深ければ深いほど、心は安らぎ人生での成功につながるのである)

## (4) 関係代名詞の非制限用法

His talents went into his hobbies, which were book-collecting and gardening.

\* which の先行詞は hobbies

(彼の才能は趣味へと向かい、書籍収集と庭仕事にのめりこんだ)

## (5)並列・列挙

There were various kinds of musical instruments such as

violins, clarinets, and trumpets.

\* instruments の具体例が 3 つ列挙されている  
(バイオリン、クラリネット、トランペットといった楽器  
がたくさんあった)

### (6) 読点の代わり

And whoever does not exert himself until he has a large power of carrying out his good intentions, may be sure that he will not make the most of the opportunity when it comes.

\* カンマは主部が終わるしるし。exert oneself 「努力する」。intentions の複数(-s)は、不可算名詞の可算名詞化で、感情を示す。may be sure と思っているのは文の著者。it は文中で問題になっているもの、ここでは漠然とした状況を指す  
(だから慈善を実行に移すのに十分な力がつくまではと  
いっていま力を尽くそうとしない人に、機が熟してもや  
るべきことをできる筈がないのである)

No man wholly escapes from the kind, or wholly surpasses the degree, of culture which he acquired from his early environment.

\* 前のカンマは wholly escapes と wholly surpasses を並列させるしるし。後のカンマは of がその並列に等しく掛かってゆくのを示す。Any man does not wholly escape ~ (not wholly: 否定語 + 程度を示す副詞 = 部分否定)  
(どんな人でも幼い頃の環境で得た文化の型をすっかりのがれたり、その程度を完全に越えることはない)

### (7) 付加的に続ける

In the midst of it you can see nothing but this wall, winding on into the distance.

\* nothing but = only. winding は現在分詞形の形容詞「くねくね曲っている」。カンマの前までで文意は完結するが、説明を加える。on は副詞で「どンドン」といった感じ。into は方向を示すのであって、...の中へではない  
(その只中をうねうねとはるか彼方へと続くあの防壁だけしか目に入らない)

A man thinking or working is always alone, let him be where he will.

\* let one be ~ 「人が...しようとも」。カンマのあと条件を加えている  
(どこにいようと、考えるのも働くのもしよせんはひとり)

We are all being judged, and generally very unfavourably judged,

on evidence which, if we knew it, would greatly astonish us.

\* 最初のカンマは「しかも」と続ける付加で、2 番目のカンマは付加で理由をあらわすカンマ (最初のカンマは 2 番目のカンマとともに挿入句のしるし、ともとれる)。3 番目と 4 番目のカンマは挿入節のしるし  
(誰もが皆周りの評価を受けており、それも自分が知ったらとんでもないと驚くような理由づけで値踏みされている)

### (8) and の代わり

It is not commonly brilliant, too often it is lamentably deficient.

\* = It is not commonly brilliant and it is lamentably deficient too often.  
(それは必ずしも優れているわけではなく、哀しいほど出来が悪いことが多い)

Spaniards are cruel to animals, Italiens can do nothing without making a deafening noise, the Chinese are addicted to gambling.

\* and を省いてリズムを出している  
(スペイン人は動物を虐待する、イタリア人は事あるたびに騒ぎ出す、中国人は賭博に目がない)

A country is as strong really as its citizens and I think that mental and physical health, mental and physical vigor, go hand in hand.

\* as 形容詞 as のなかでは、副詞は形容詞の後に来る。mental and physical health と mental and physical vigor は言い換えでなく並列 (goes となっていないことに注目)。あとのカンマは主部が終わるしるし  
(一国の強靭さはその国民と軌を一にしています。健全な精神と肉体は、活力ある精神と肉体と表裏一体であります)

## 3、演習

それぞれのカンマの意味を考えながら、訳してみてください

I am not one of those conscientious travellers who, before they visit a new country, spend weeks mugging up its geology, its economics, its art history, its literature.

The parlor faced southeast, the sun went off it early, which made it beautifully cool in summer but in the afternoons at other times of the year a little sad.

Nay, some are so cautious on this head, that, to avoid a possibility of killing the patient, they abstain from all

methods of curing, and prescribe nothing but what can neither do good nor harm.

Real patriots, who may resist the intrigues of the favorite, are liable to become suspected and odious.

But, between ourselves, if it were not for the convincing evidence of this wound of mine, I should be surprised if they believed my statement, for it is a very extraordinary one, and I have not much in the way of proof with which to back it up.

The more things a man is interested in, the more opportunities of happiness he has, and the less he is at the mercy of fate, since if he loses one thing he can fall back upon another.

The great rule of conduct for us, in regard to foreign nations, is, in extending our commercial relations, to have with them as little political connection as possible.

第 1、第 2 のカンマは挿入節のしるし、第 3、第 4、第 5 のカンマは並列のしるし

まじめな旅行者でないものだから、あたらしいところへ出かける前に何週間もかけてその地質とか経済、美術の歴史や文学を頭につめこんだりはしない。

第 1 のカンマは and の代わり。第 2 のカンマは関係代名詞の非制限用法のしるしで、先行詞は前文全体。

居間は南に向いており、太陽が早く翳るので、夏はとても涼しいが他の季節はちょっと陰気臭かった。

so ~ that の構文。第 1 のカンマは句と文の区切り。第 2、第 5 のカンマは読点のかわりでいわば呼吸を整えるもの(そこまでの語、句、節、文などが長めと感じられるときにつける)。第 3、第 4 のカンマは挿入句のしるし

なのにこの点を用心深く考えすぎて、患者を死なせはせぬかとあらゆる治療法を控え、毒にも薬にもならない処方しかしない医者もいる。

第 1 のカンマは関係代名詞の非制限用法のしるし。第 2 のカンマは主部終了のしるし

真の愛国者は、国民が親近感をいだく国の陰謀にも抵抗するような人物であり、疑われたり憎まれたりしがちだ。

第 1、第 2 のカンマは挿入句のしるし。第 3 のカン

マは文を区切る(条件節と帰結節)しるし。第 4 のカンマは付加的に続けるカンマで、理由を示す。第 5 のカンマは前後の文(it is ~ と I have を並列させるのをはっきりさせる読点の役割

でもここだけの話ですが、私のこの傷という明らかな証拠がなければ、信じてくれといってもどだい無理でしょう。何しろとっぴょうしもない話で、裏付けとなるものとてもあまりないのですから。

[ { The more things a man is interested in }, { (the more opportunities of happiness he has), and (the less he is at the mercy of fate) } ], / [ since if he loses one thing he can fall back upon another ] .

第 1 のカンマは比較構文の前後を分けるしるし。第 2 のカンマは the more と the less が並列することをはっきり示すしるしで、読点の代わり。第 3 のカンマは以下付け加えのしるし。at the mercy of ~ 「...のなすがままに」。If 節と帰結節の動詞がともに現在形なので、条件法でなく単なる仮定だが、ここでは譲歩(even if)の気持ちが入っている(...にしても だ)

興味をもつことがらが多ければ多いほど、幸せを感じる機会はふえ、運命に翻弄されることは少なくなる。あるものを失っても別のものに頼ることができるからだ。

The great rule of conduct for us is to have with them as little political connection as possible.が文の骨子。A is to B は、予定・義務・可能・運命などをあらわす be to とすぐ思ってしまうがちだが、ここはそうでなく「A は B することである」(A = to B)の意味。第 1 のカンマは主語の強調、第 2 のカンマは主部の終了を示す(あるいはこの二つで挿入句の形成ともとれる)。第 3 と第 4 のカンマは挿入句のしるし

外国との関係で我々が行動の重要な原則とすべきは、通商関係を広げる上で外国とはなるべく政治的つながりはもたぬようにすることである。